

13  
2208  
14

星月夜顯晦錄三篇卷之四

目録

- 次郎朝時兄の練は貞子罪を糾す
- 式部丞泰時隱密は舍利胡時と孔明の圖
- 局松嶋御所の帰客
- 實朝卿局松島と云胡比奈義秀は賜んと牛久
- 奉付文書附せ争練因

局松島尼公より而遠よろくて愁傷の事

○尼公嫉妬局が縁結を妨げ却て胡時ふ婦せしんとす

局松島尼公の夫よ貞女の道を遂る事

星月夜顯晦錄三編卷之四

次郎朝時兄の諫よ隨て自罪を訴へ

兵書小彼を知り己を知りとて百とび戦く百とび勝とす。

彼とへ敵あり。己とく味方たり。重す軍勢の弱れども常乃  
車もよき意をひらく處をぐ。義時唯和田の悪むべし伏  
坐しておのとよ輩あらば。兵へぞ。こそ百とび争て百とび恥辱す  
い。所謂う。北條泰時あり。子細あら。義秀が礼門と延喜  
ちむ。又泰時この序は和田が威と折ふと欲きべ。是非朝比奈を  
罪ふ。墮さんとれり。君も廣元も泰時が言をせり。とく。  
病院のゆ治よかう。びれバカう。泰時が所存う。才胡時  
夜あ涉奥の守護を乞受あら。御所をば所勞にう。夜詫退生

甘一姫ちよひめすれども故ゆゑへ改かへば。今朝もやくゆうふ顔色おもていろをまじでる  
かとぞ。されども全く病氣びょうきともざれば。不審ふしんよぢて夕夜ゆふや遙電とほでん。  
今日の経さん義秀ぎしゅうがア否ねを考かうか。兼あわせく好色こしきうれべり。や壯士さうしも  
朝時あさをびやと疑うそ。先身あぶらみ一色いっしきと尋たずね向むかんとれり。をこようと  
奉時むかへ急いそだ立たつり。方かたと閑所かんじょよ振ふれ。汝なが顔色おもていろ常つねあくべ。あはれ  
深ふかく勞なぐらうと。うそとれがふ。子細こまことにあぐ包いはだべ。何事なんじたちとも  
よほへ。手てひひぬさへ。我われ卒そつ教訓きょうくんを加まへども。汝なを用もちい  
ざる也あ。よび局逐電つぶららでんふほき。りと甚ひそく疑うそへ外ほかす。兄弟いりいりのあいよ  
隠かくすんすうあけと。汝なをれと。既すでよ今日如此ごじよと。久ひく絶同ぜつとうのばか朝比奈あさひな  
が。おん咎ごんきゅうの説せつけ。ばきよ語ご唆くせけと。朝比奈あさひなと赤面あかおもて。眞まことく云いふも  
出でごりしげ。俄わがよ座すわをもじ駆のさんと。奉時むか驚おどろきり止とど。何事なんじあく

何方どこへ行ゆぞや。所存あよぶも重うみやべ。相談あうだんの筋すじもあくべ。と宥免ゆめん  
漏あきらめりだよ朝時あさ明あけ形かたちをよつこ。疾めまいを浮うき先まへ。今丈じよヤモ面目おもてみくゆゆが。今日の  
内うち礼明秀れいめいしゅう秀ひでちん。吾わの根子ねこば吹ふきて。安困あんくんとて居ゐよれど速はやく名なふ。そ  
朝比奈あさひなと救すくいんべあくべ。と。所ところへあんとある。秘ひく。あくべ。次つぎ才さいア  
上あがく。局つぶらよ糸いとかけ誘いざなひ。と。朝比奈あさひなよ助すけうれ。奉むかさを語ごり。す  
局つぶらと送おくりぬさんと。ぞんぞれども。幸事こうじよ歎たんこど。みづみづく。おうべ。箇くわちく  
をうよ。秀ひで伝つた義ぎの白しら狀じょうを取とり。斤きん時じを度とす公ひきくいと。白しら蛇へびよすに  
そぞ。奉時むかりつと吐息なまけと。君きみやと。ひひゑす。よ。累たまごて推量すいりょうの通とお  
う。されば。又また幽ゆう愁しゆうせう。今丈じよ呵かて益まするにと。まじ。の名なを余まへ。義秀ぎしゅうが罪つみと  
赦ゆるんと。し。衆しゆう神じんみよと感うなづく。内うちかよそ。激げきえんと。あが。おはくへり。狂きょうのあが  
べき。秀ひでのゆふあもあ。身み一いつ依よ怙たよ見みい負たまのゆほと。うそうそや。よ手ていだ。

式部丞  
隱密は舍方  
胡時と  
孔明

の事



そもそも汝先輩を悔ひの心あるか。朝比奈へ恩返し。自ト名のを  
かよ。左近へ憲法立ぐ。汝もやうと考えとあらぬ様とあらべ。  
明日和田左近。尉侍所よりこれるゝと云ひ人。又就て名ふかよ。並ぶ  
却てよ病へく。交断もん。且至盛が賛嘆を散ぜし。道理こと。利害を  
説てや含み。バ朝時承知。その夜へ休息し。翌日和田が仕を  
伺ひ頃。朝時侍所より。お戻り盛一人。あらうや。社首尾くと  
き。和田は向てあらうへ戻ねぬ。てよ。す。新季後山不審と云ふ  
べ。塙ふみびぞ。白地より上と。川移ひ。せし。某事。轍車の。と。意  
う。頗脳。おそれ。幸と。達せんが為。右の始末。かよび。歎。勤め乃  
者。よ見外され。あらも。秀次の。細面。せば。既。又。擱。と。う。し。と。浮。情。を  
表。て。連れ。先輩を。ふ。至。そ。頗。惱。の。雲。方。も。晴。れ。を。早。速。

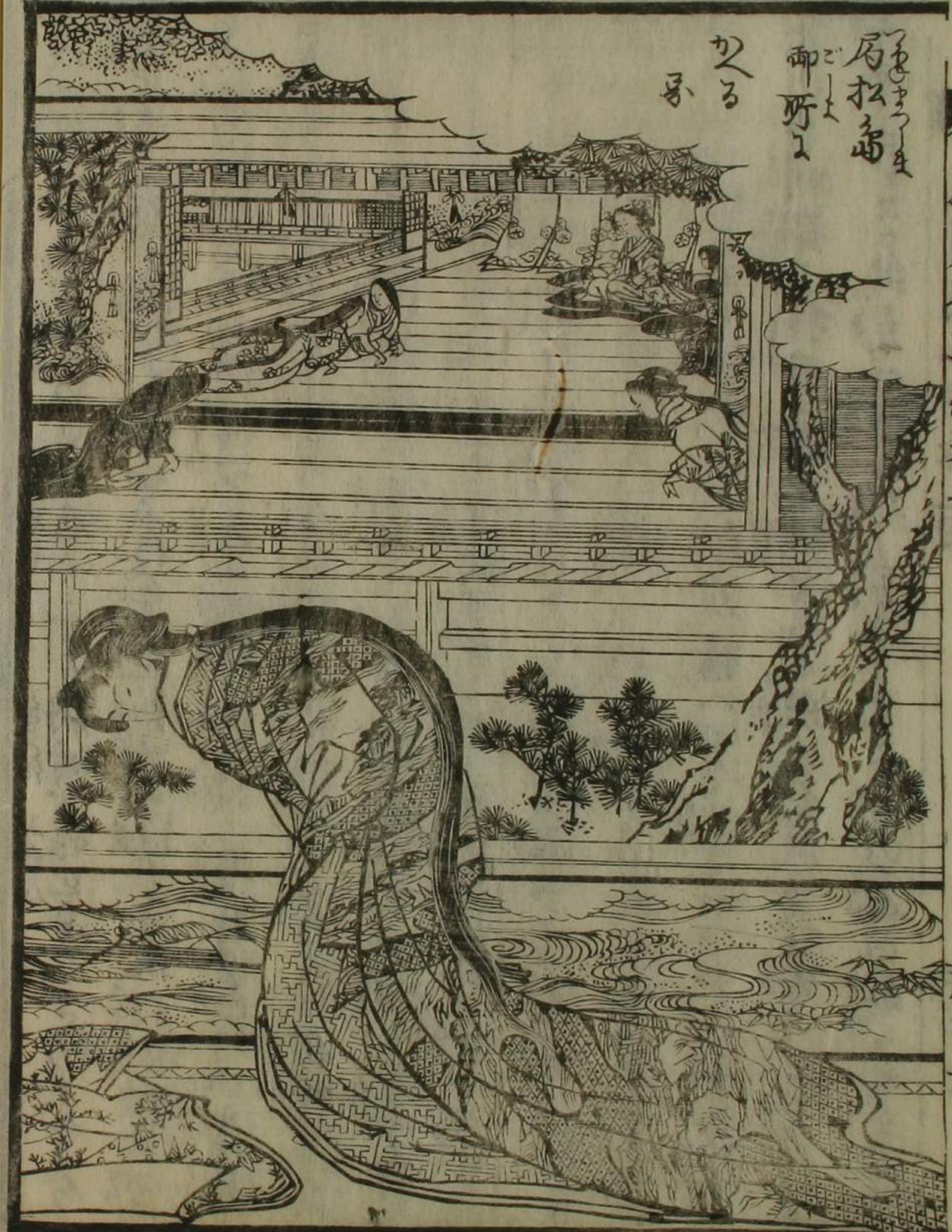
局と遙り。ゆをべ。ひ。ぬ。そ。の。内。夜。明。人。月。せ。る。ひ。猶。豫。の。向。よ。ナ。ヤ  
ハ。九。明。の。事。と。而。リ。名。を。出。ゆ。る。と。委。細。よ。物。居。局。よ。放。く。ハ  
渡。せ。ざ。る。紙。子。絆。よ。绣。出。せ。し。へ。罪。科。御。こ。と。る。在。私。宅。へ。付  
と。ハ。ヤ。セ。ど。も。秀。友。の。義。よ。私。と。そ。の。侵。さ。る。無。い。る。よ。病。  
而。斗。ひ。下。よ。る。其。名。素。生。う。る。を。秀。友。よ。罪。あ。ド。早。く。侍  
變。ひ。を。頼。み。あ。ると。や。け。と。ハ。罪。盛。皮。と。自。承。よ。名。素。生。う。る。上。ハ  
別。義。あ。れ。ド。を。あ。ら。け。事。高。岡。よ。達。そ。の。山。經。義。あ。れ。ば。某。一。入。の  
斗。ひ。ふ。も。成。ぐ。に。殊。よ。牌。義。秀。が。る。ゆ。有。く。自。由。の。變。ひ。牌。あ。く。  
店。の。父。相。判。殊。よ。衣。は。吟。味。せ。ぐ。れ。う。ど。も。我。子。の。工。と。あ。り。て。は。是。服  
と。女。の。雅。々。只。君。の。思。石。よ。任。せ。ナ。ま。が。は。身。の。為。も。足。か。ぐ。一。先。度。を。ま。體。  
か。ん。度。よ。達。ま。ご。き。あ。り。と。と。朝。時。と。侍。所。よ。苗。魚。て。度。え。を。清。ド。有。

角張渡。はびの後始より。内中の沙汰とて吟味中。奉事  
不取手の方ある。至死當時領了是を紀し。愚息義秀が所為  
ありとく。某よ吟味せうとやに余。我をも憐み罪せんとの結構。  
あれが取道より故人の不善を重んじて敢自あらざる  
事を。形のどく大造よきよし。昨日の経糸も。我子のよ一秀を。  
程々拷問させんとの。ユモトと知るやいと易を幸ふ。秀  
ハ子とやらども。未だあるひまだ世の人あり。されば。自ら拷問の  
事。條づて奉主あるひされば。君のちん半ひとがり。あはね  
今朝時が名宗坐する。のうれば。つま毛と孔明。局を御所へ  
送す。ぬきを。毎時が面前みて。不善の罪を加へ。いと易と。ども。  
彼ホガどく。嫉妬のかりひを。存ぜぬ。家盛。未練の振舞いにて。乞

所存毛改す。その上某これを礼め。北条家の恵厚すがからば。  
志ぐべ又例の嫉妬を生じ。つま毛眼と。彦三のユ夫とあらん。  
必定あり。其是とあらず。あらあら称ども。諸者君罪犯を。すへかう。ば  
國家の憂を引かせりの。お一君のちん内あらば。余この義と  
あり。渠おが怨恨を。おとす。そふう。すく。よ達せられ。君の  
口交渉を。何ひかうべ。殊よ胡時又と。智。若輩。やうがら  
義を。毎へ。秀が罪と。故人とも。名宗坐する。志。健氣の羣  
眾せられん。も不便の。いそ。こ。一旦。おひ込。すく。意義よ。よんり。そ。  
奪ひ歩を。行の。公底。秀が助られ。お伝糸。よ。ゆ。が。凶を  
號す。自ら。行歩に付ても。彼へ。内縁厚ければ。或も尼。又  
はく。名宗坐。是の。いづ。く。すく。名宗坐。是の。いづ。く。

因掛け訴せらる。寺内の及ぶ所もあらず。あざりて寛を以  
投さる攝師も准を必定。兄泰時がとめられて。勤め部よりの  
みどり。何ともせよ。先輩を晦との訴因も家秀をめりとめて。  
助けねせ。そのうへ空一かづら松。胡時が令と助け妻へ。而  
此木をかん倉あそばれ。執達もろべ。定てひ化むのちん手ひあぐんとや  
け。バ廣えぬと笑て。且驚歎感ド。相久の子息がゆうんと  
斗ふ。うれ。胡時が重訴祚め。う。その元又君のちん為。静謐のミを  
意とせ。う。既に良雄。かよぶふあるん。おなじも定く後悔の公出  
ヤ。バ。れ。ば。誠。よ。君の大幸。う。と。扶。扶。あ。く。君邊へ疾せられ。善  
侍。所。す。ゆ。く。度。え。へ。往。ド。な。ま。だ。は。沙。法。を。侍。ぐ。ー。と。て。オ。胡。時。を。招  
一。む。極。も。度。え。へ。胡。時。が。訴。せ。ら。る。ほ。身。矣。矣。が。ふ。底。き。で。り。至。に。や。上。れ

されば君も大よ警をひ。存ト。する。胡時が振り。さ。の。ト。ま。ぐ  
弓を引く。ゆ。入。べ。と。令。せ。下。し。度。え。和。田。よ。達。を。る。友。於。胡。時。へ。ア。キ。  
そ。の。筋。の。役。圓。へ。ヤ。た。し。速。を。幸。弓。松。山。を。ゆ。一。入。あ。け。と。て。山。高。訴  
ゆ。院。セ。あ。し。招。す。か。ん。弱。ア。ク。る。に。局。ひ。え。金。利。發。の。女。う。れ。ば。胡。時。し。え  
誘。上。か。と。り。ど。モ。御。狼。藉。の。後。う。く。先。逃。と。晦。ミ。宿。そ。ー。大。切。よ。す。う。女  
並。つ。う。ヤ。ク。る。也。行。庵。も。今。文。不。便。よ。ヤ。臣。武。わ。の。ち。ん。辞。へ。ト。ア  
仰。上。す。れ。初。時。か。罪。を。山。宿。を。き。れ。ト。山。執。成。す。尼。公。ふ。め。け。と。ア  
され。胡。時。犯。を。外。の。罪。か。く。の。ど。。犹。權。へ。り。ぐ。年。ト。つ。ヤ。と。も。ん。弱。す。ア  
と。宣。の。景。時。領。よ。和。田。ふ。罪。を。深。せ。ん。と。胡。比。家。絶。ゆ。び。生。又。景。登。よ  
吟。味。を。セ。ら。る。女。の。毒。よ。や。尼。代。へ。と。ど。モ。そ。の。後。の。勤。や。家。秀。



されへ止ぐてのみ修まること。朝時名を失ひよろんで、朝時子の  
とみとへいづらふと探すゆゑ。朝時生仕ひあは。疾はよとせ。案子  
相違。大に驚いた。世が居もう。春時あく又と殊やけり。秀  
仁義と兵へ情せむ。先と助け。その前也不審とるゆきといへども。義と  
ありて名をナミド。又へ是と居な。後て義秀は罪を犯せん  
と。朝時の不快の意。益々過ゆ。折よお受けへ。毒か。アド。  
携向と延べと勧めナセ。今朝時が罪め白るに。ナレ。召され  
ばや。上界トロ何の仰ゆ。以彼と聞ふ。赤練のゆ云。禁多生  
あ。ベカ。と。脱解。ケモハ。モ。ナシ。漏息は。在る。義へ。  
内は。と。石毎。羅生する。如。右。と。左。有り。是。由。請ヤ。テ。ソ。  
降みて。朝時所存の外。も。不。後。非法。左。右。往。ひ。唯。法。を。從。て

罪科。又。知せられ。下さるべ。立流。又。述け。君。も。左。と。あらんと  
そ。召。重。て。仰。タ。ル。朝。時。罪。も。と。り。ど。も。先。罪。を。悔。ひ。早。く。名。を。そ。  
局。も。み。下。く。ゆ。る。に。う。憐。愍。次。加。べ。き。旨。双方。う。の。扱。い。奥。う。も  
朝。時。褐。う。て。改。る。の。志。神。め。あ。ん。バ。罪。を。宥。め。と。が。ヒ。越。る。彼。是。然。リ  
か。され。が。罪。科。を。免。し。中。邊。ま。き。と。う。从。後。教。訓。へ。公。任。し。と。朝。時  
か。の。ど。あ。れ。バ。義。秀。於。貧。ぐ。ま。す。あ。う。だ。の。夜。代。人。の。勤。あ。す。く  
捕。う。れ。が。朝。時。車。と。面。縛。せ。れ。罪。科。遁。と。遁。き。中。邊。の。私。辱。せ。う。入  
ゆ。ド。予。も。内。縁。を。繋。す。れ。ば。義。秀。よ。も。あ。る。酒。ド。を。よ。義。秀。奇。特。す  
斗。ひ。す。れ。ば。其。義。秀。よ。な。び。ぞ。私。辱。も。無。く。因。へ。朝。時。跡。う。跡。ぞ  
た。ま。が。富。る。も。せ。ほ。あ。り。是。と。そ。の。義。秀。よ。助。ト。れ。一。義。理。と。る。す。ま。う  
物。と。ば。彼。が。恩。ま。う。べ。一。珍。く。内。く。礼。附。も。う。そ。ち。ま。う。と。仰。渡。さ。き

けとば。其時雖仕合ひを存と估計して退ひよる。續て秀忠を  
臣とされ是又右の内侍御使され。秀忠は構あけとが是をの通り  
精勤モトと仰被され。別候より秀忠がの半ひ二の利を食て太を  
ちひ。且朋友よ信あるの聖教みかみ。神めの奉勅感ぞよ餘あり。殊文  
汝國家の為ニ私憤を捨ての到底廣元よりゆる如也。每の太志  
忘ニ至りと嘆ひられ。また回因を施し。孔紹一をすて廬宅へ。  
即刻秀忠れども出仕を遅させり。馬上件納う  
けと。

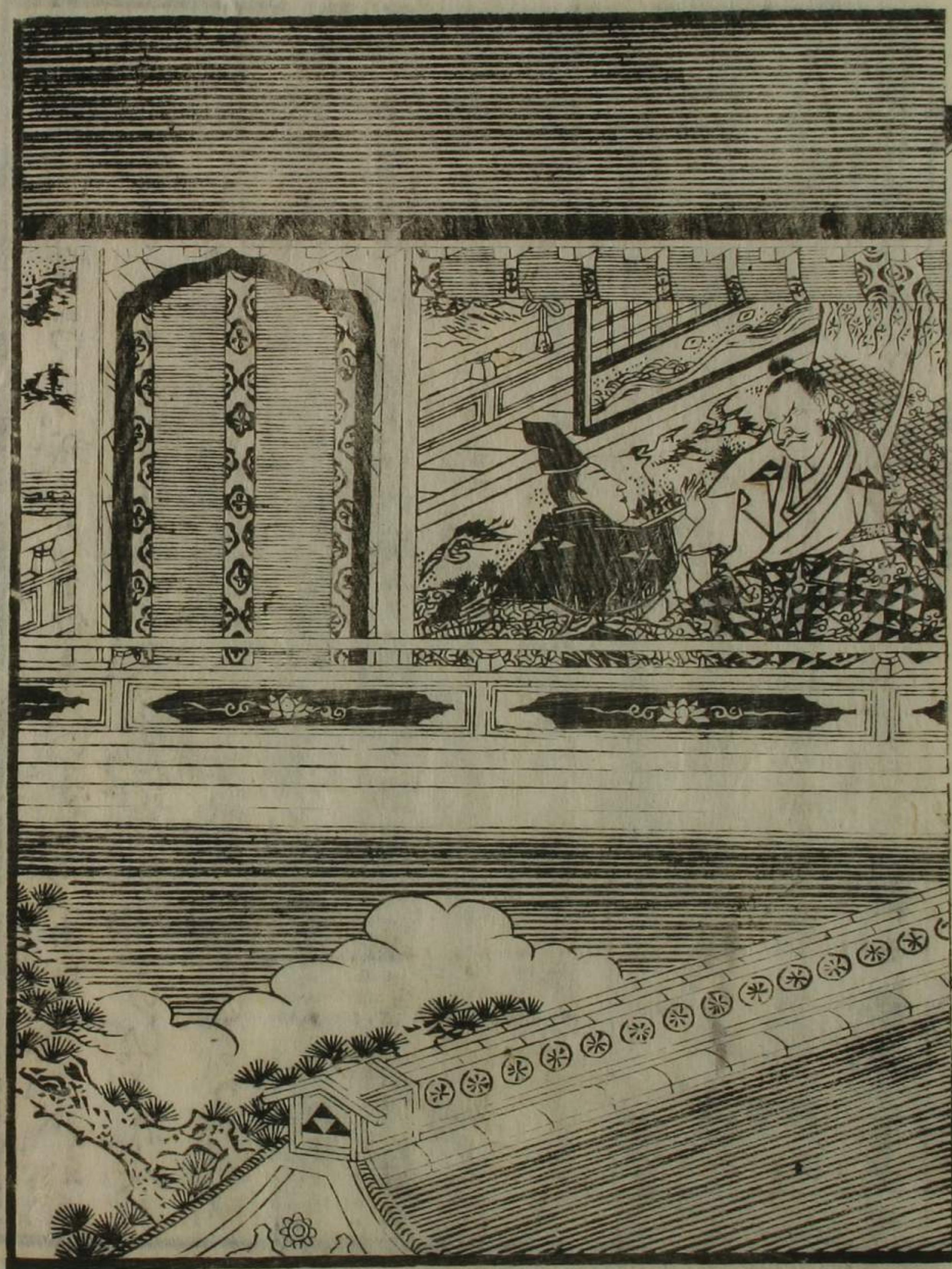
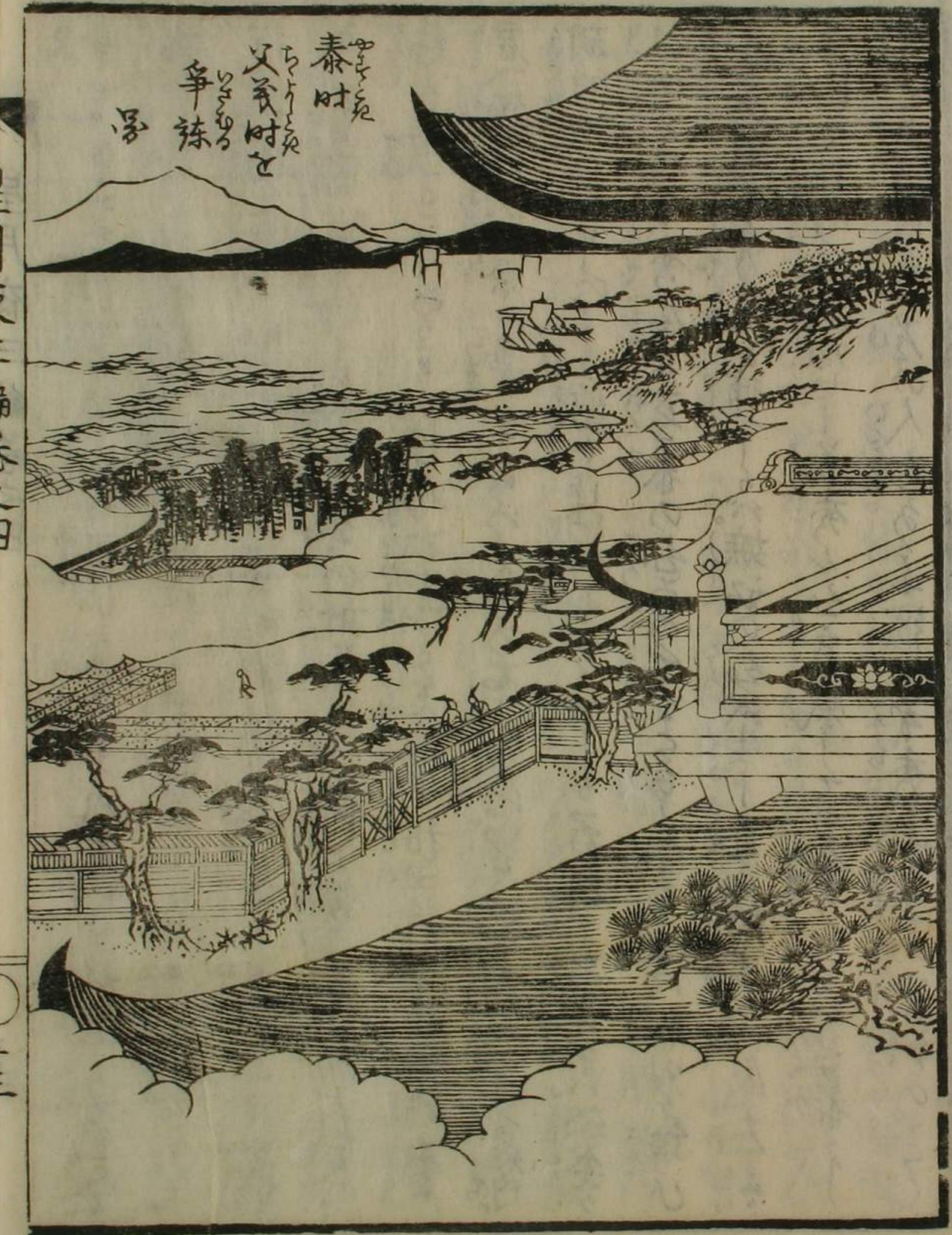
實朝卿易松嶋を以て朝比奈義秀より賜んとす。夫  
嫉妬偏執ハ人の生得うりとし。徳道と并へ恵みかるの公す  
時ハ自止べ。意止ざん。禄重とらぐども爵貴とりども教す  
里下は是を昏愚の小人とす。身をも害す。忌精の公す。  
齋の至り。小弟義時は祿食の執權とく。武門の叔父  
されば威勢盛まつて。一門の榮榮くる。比肩まぎりのじ。  
とりども嫉妬の公年を追そ。據也。和田義登が功劳也一  
より。彼忌憎ミ偏よ羅一頑んとのみ。あくに朝時自縛を  
亦へある。又。義登御も其時の義あと。輩ひのわとて。小弟  
一家の耻辱す。於とく。伝承を守り英雄也。却。朝時が  
志を憐く。慈愛の交ひを冀ふ。同く祿食の大臣。すこもとを  
雪し。泥と隔る。御も。御も。胡村昌亮の正め。御の正堂も昌亮  
がうへ。全く内祿の本と大變し。かれより仕事せむのとて。又  
未時一をまくの。財貨は。ふとうち。ある。和田又子へ謝辞すも

及ばずし。うべ式部丞奉時大又。ひがみ障。や。又の弟よ。生て今。殺。か。が  
非。え。諸方の店。壁。よ。ろ。ては。咎。ま。う。し。へ。邊。家の眉。因。よ。御。す。と。ら。せ  
世。上の。う。め。和。田。又。子。が。り。亦。又。よ。う。の店。仕。並。あ。く。ん。ば。け。ざ。る。ま。よ  
り。教。訓。を。仕。せ。と。宣。ひ。一。君。の。店。内。か。の。成。敗。を。争。て。人。口。を  
塞。ま。げ。ト。の。に。事。ま。り。ワ。グ。家。を。店。員。の。餘。フ。か。代。附。を。せ。ゆ。す。と。ろ  
され。ば。早。速。ま。ま。を。斗。ひ。ゆ。べ。ま。よ。薄。金。の。机。權。を。も。業。く。あ。と。古。文  
手。道。下。背。き。り。の。次。捨。ま。す。る。は。私。亭。の。才。一。ふ。い。殊。よ。店。又。子。の。間  
され。ば。む。き。り。正。手。ま。づ。た。苦。よ。は。彼。え。本。罪。科。よ。處。せ。ん。人。覺。悟。の。所  
助。ア。リ。不。財。の。僕。偉。ち。よ。バ。一。令。セ。ひ。よ。こそ。及。び。ど。と。モ。未。後。は。効。尚  
あ。つ。そ。が。く。る。左。う。く。ん。金。印。紙。ち。よ。ざ。る。に。似。て。多。く。の。店。行。役。と。物  
や。う。ん。人の。形。と。れ。を。育。へ。生。ア。う。ぶ。身。を。れ。ま。く。事。ま。す。と。又。の。傳。ひ。り。

外。ハ。四。海。の。み。幸。と。き。つ。ゆ。ハ。誠。よ。大。切。の。里。事。よ。び。や。和。田。左。門。尉  
社。義。即。底。兵。へ。朝。時。訴。か。じ。と。主。身。是。と。計。び。廢。元。よ。就。て。店。客  
達。と。天。晴。義。者。の。报。ひ。そ。の。義。營。の。ら。う。ん。外。省。あ。れ。ば。早。く。胡。時。を  
糾。絞。して。退。け。り。へ。じ。ち。る。時。ハ。君。の。仰。も。立。政。至。る。私。う。に。出。手。  
立。け。通。江。底。然。士。感。伏。ら。く。う。胡。時。が。政。系。の。次。不。曉。ひ。ナ  
ベ。け。と。が。永。く。義。絞。せ。ま。う。か。あ。う。べ。因。も。胡。時。が。為。あ。く。の。差。付。修  
捨。並。あ。り。然。人。胡。時。紙。笑。ひ。た。孝。を。無。ざ。る。苟。く。と。嘲。罵。ひ。ナ  
絆。は。賢。高。く。底。日。下。る。ぐ。と。練。く。ぐ。胡。時。在。と。は。ら。ひ。く。ど。底。子  
ど。も。放。ま。ん。と。底。憂。思。下。り。教。訓。を。加。へ。い。の。仰。へ。絆。ナ。笑。せ。け。ひ。後  
放。將。多。免。相。よ。との。店。と。一。因。少。免。下。ま。れ。底。罪。せ。ん。へ。君。へ。の。怨。あ。り  
代。バ。胡。時。又。異。見。す。皆。く。押。込。重。ミ。と。言。り。る。奉。付。押。込。宿。危。

弟へ押込まとも。代人へ又ユツクシム。とぞれバ人リバ塞ギエア。  
君トウ教トされモ。尼公の所歎ひ。ニツカヘ朝時を罪トメテ時へ。又秀  
その後審代助け取セ一罪と逃且モ。モリ代ラズて秀秀が助ヒ  
ヤサバ君モ有チキム。仁義とちる筈を勤ヒ。感有チ。朝時を  
免。朝比奈より罪のからぬ格よとの所耳ひテ。又秀終トモ。人  
又子の秀とちりタク妙よりだ。又朝時を不侵ヨリ一戸居モ。  
和田が秀秀をもす。我子の情へ度ニトモ。ちうれども武士の  
義理死立ゆくが由。又秀は不妻をめり付。又登は徐義をさせ  
られバ用捨る。礼向と。善化人ふとべ延リ。びげきども。我子の  
事也。その産。又黒白分えと底。朝時多祭牛する物。又登は方へ  
ナ達。又正向。又リ。耳ひタハ。又リ。耳ひタハ。又リ。耳ひタハ。  
ナ良。

弟登く人情よつて。我子の不侵も人の子をもふ。同。に。又。之。  
方へ告ぐる。その未途。又秀。又文。度。仁と。ひ。義。といひ。人を  
是と感せ。又。朝時若罪科。又。せ。ト。れ。一。食。失。ハ。レ。じ。ま。う。ん。朝時  
を不侵。又。古。ベ。速。又。義。彼。又。リ。ベ。又。教。又。胸。血。眼。又。の。う。て。極。活  
セ。又。古。又。胸。又。活。又。朝。又。朝。又。朝。又。朝。又。朝。又。朝。又。朝。又。朝。  
富士郡。又。娶。居。セ。し。又。車。君。嘆。名。乃。居。左。あ。御。あり。  
諸。士。又。是。斗。ハ。御。正。又。斗。し。と。私。活。ト。又。富。君。嘆。名。乃。居。左。あ。御。あり。  
先。以。君。の。仰。み。も。和。田。へ。内。と。礼。謝。又。び。き。又。貞。令。ド。ナ。リ。往。ふ。今。日  
又。至。く。云。み。家。あ。一。云。の。は。接。接。モ。ト。私。活。ト。又。諸。人。和。合。の。様。又  
ひ。こ。ヤ。セ。一。云。の。は。接。接。モ。ト。私。活。ト。又。諸。人。和。合。の。様。又  
ひ。こ。ヤ。セ。一。云。の。は。接。接。モ。ト。私。活。ト。又。諸。人。和。合。の。様。又  
何。ぞ。義。登。モ。納。ト。謂。あ。ん。や。又。義。モ。於。て。又。縱。令。勅。令。モ。リ。又。



食せざるゝとも同ひをゆべに。再び言ふとあれ。忍かへん事うふと。奇  
騒ご用ひされば。奉は愁傷されども甲斐ある。その修止みたり。  
左近尉義登よしのりが久修くじゅゆす。當時嫉妬しつねの増長ぞうちやう。忍かへん事を  
無なき。方食かたくと用ひざる不法不義の奸臣けんじんあり。内うちに憤り居ゐる。又  
愁を銜くわむ。あらう。被居はれゐる。彼居はれて先達せんたつ。和田新兵衛尉いんべ胡登ことう  
君きみへ預まつひ。胡比奈こひなが妻めよりあらへんとの事こと。いよいよ左右これゑだ内うち。  
胡時ことき説せつへ告おほせ。胡ことう。薦すすめ。胡ことう。胡登ことうが  
船ふねひく。義秀よしう局きょく。高たか暴ぬるの心こころあらうものとある。あくまで胡時ことき説せつひ  
生うきの財。義秀よしう毛けと捕つかへり。嫉妬しつねの心こころが生うり。直ただよ訴うそへて。左さ  
よして胡時ことき放はなせ。義秀よしうが心底こころ感うなづりても金かなりあう。高たか暴ぬる  
者ものとあらう。いわゆる人ひとがあらふ。誠まことに義秀よしうが宣名せんめいの字訓じくんの如ごとく。

義よ秀ひでゆき一い者ものと感うなづく。休やす。兄胡登ことうが死しひ。往むかせ。義秀よしうは窮きずせ  
り。あんなやうなは。高たか暴ぬるの心こころあらんと。限かぎよ易やすひ。ひけわへ。ひ  
難むず動どうのえよ。局きょくは高たか暴ぬる。登のぼる。外ほか胡時ことき入い。又限かぎ。かく。壯士そうし  
一い弓ゆみ。弓ゆみひひ。而後それの後あと。胡時ことき狼籍ろうせき。達たつ。不ふ便びん乃  
ハ。矛ほ。定さだまる夫めある。然しかへ其憂ゆうもあらぐか。よつて。松島まつしまを家臣けいしん  
中なかへ。嫁よめせり。人ひとと名なふ。生うきて。和田新兵衛尉いんべ胡登ことう。彼女かれを含むま  
義秀よしうも場ばり度たどと。死しひ。自由じゆゆの牛うしひろくが死しひ。舊ききく。あらう  
べと。ヤ。渡わた。亞知あぢ。零れい。也よ。自由じゆゆの牛うしひろくが死しひ。舊ききく。あらう  
牛うしひ。伝つた。義秀よしうを以もつて。胡時ことき。助すす。神かみめの牛うしひろく。巴は。其業わざと。忍しのひ。元  
朝あさひ義秀よしうが。死しひ。也よ。渠渠へ三浦みうらの株きず。義登よしのり。三男さんみく  
実じつ。源家げんけ一族しやくの眉まゆ。り。局きょくが夫め。配はいも。妙めう筋すじ。月つき。あらう

ひきともさうべ。されども和合せざる縁を。半身とも産み。尼が到底  
りとあんへ至がまけとども先所處の所存なりとあんと宣言ひ  
く。古所は變えそ。宴りとてかに秀じた器量ある勇士乃妻  
く。んへ居ゆ奉ゆべ。自ら又於て外より存すゆりと早速居ても  
ナ波セ。公底をも向明あゆりと。嘆言あり。遂後尼へ天の子と名號仰波  
まれ。尼衣あくび色をアベと宣ひられ。松島山の門越えども候  
えども。あとやうに腰を上り。袖た身をとりて天の山へ下さん  
車。否。腰をきせず坐をく。幾重ゆかとまくある。とも娘九  
曲侍ヤケラモ。坐をすまほはねびあり。すうと武の山方へ告させぬい  
くが若ゆ。尼の緑辺尼公を告をもばんべ。如何あんとお市賢あ  
ま。市持湯と耳にせられ。仰上らぐき積みて背く。油体もみだぬ内へ

弓の方より胡登よかと告。はがひの通りに舍才又松岳及と下る  
よ。内侍變りと知せり。胡登候ひ胡比奈のあや吹け上六又  
吾あんと。先長兄新左衛門尉を登す相望す。兄才又の者よ出。ご  
事の始終をや。その店手ひを物語けとべ。其登も否ぢ。まよあく。子息  
等がひひひ。そのゆ手ひふ部りのあく。秀が面見る。下  
武將賢才と左せば。その義やあく。尼公の所存を承り。左  
左衛門侍べと。然る。然るよけう。當時傳。例の偏執と記。息  
朝時より湯を。女あるに。秀又下さんと。殊念玉極見に負の店手ひと  
憤り。極て尼公の所よあ。け訴を。上かの局を。下さうば  
も代を。仕士等眼を食み。禍死し。あんへ必定す。殊より。一とえ  
朝時秀ひ生を。尼が。尼の罪あたよあく。ばく。胡時に免を

とりども。系乃依守りて差役仕退拂ひ。その朝時が懸合の局と  
義秀よ帰りて。我一族の和辱よゆびや。りゆ仁公の山中ひよ  
ト。子れをか。朝時がおの女あるをは先の上より局をゆくと存せ  
と。自ら勝ち伏せやらる。尼公元来嫉妬生れに事。妻の生悔たれど。  
義時が去禁伏せゆき。は縁起よあそへ。是れ當べきと宣ひ。朝時を  
取られ。即時又義わの山中へ山後をみて局ねもす。帰系まとどりす。  
一旦朝時が為よ迷ひ生され。とまへ今近のぞく奥よ石仕へれた  
彦氣よは仰るべ。朝時山先ありしきも。又美終て退山せり。  
あくべ局をも背く我方へ寺へ立と。何事もく仰送られ。と  
ころも。かへけ方の山後を山邊有すの事もと。頗る迷惑され  
一ぐづと山安よ達せ極まる所とぞ。后先までより朝登が聲

且ひげ。び義秀が振旦秋めあるがゆ。局と与へ妻となす。先  
再び壯士をも懸念す。しんおとごんとぞ。の旨す。後一とど。  
母公金乃上りて表向す。おとごんとぞ。の旨す。後一とど。  
タヨニ公再び山後をみて局が縁辺とうなむよ。ぬま。と。胡  
拂い。食の女と自由よ嫁せ。めりうると。せふ。と。その上。数多の壯士を  
かげて。やきうと。と。死ゆ。つま。と。か。と。の。と。胡  
仕。木眼を。と。ひ。と。殺乱を。生ぜん。め。と。か。と。胡  
給仕せ。か。行く。の。ひ。法紙止。月日久。行くる。上。み。と。り。と。胡  
べ。今。止。の。死。ひ。か。と。乱を。お。と。だ。の。と。ん。變。と。と。胡  
つま。と。局。ハ。軍。く。山。方。へ。走。と。と。嚴。と。仰。然。キ。と。胡  
大。よ。歎。身。と。歎。と。嚴。と。仰。然。キ。と。胡

山居のあんえへば候仰はスカルハ。是又幸まろく。乃ニ尼をぐら。  
尼公の仰あれバカム。局と亞シテ右の肩仰せられ背く。尼公の  
店所へまづモ由宣ひる。モゾ局是をうけあつり。大よ怪死。公中警  
エテ詠き遊ミ。邂逅の店免を慕フ。あり人の許ヘ嬉さんと。天ア  
恵び北モ在ひてありつる。かる障碍よ遇ゆる。モト声を咽で泣き  
沈ム。又モモ慕フ。然モ尼公の店辟よろへ。いきど先のあん返す  
る。中。局を同道。内。と。途の者。戒され。バ。局ね山泥く  
是。又。傳。唐士の王照君が。胡の國へ。嬉せ。やれ。が。別。の妻也。  
今我家の上の想ひ。すれ。涙を涙。す。す。と。是那。モ。よ。が。ぬ。ひ。等  
あり。

尼公娘姫局が。碌。疾と妨げ。却て。朝。時。又。嫁。日。め。よ。だ

月明され。夜雲。掩。月。花。盛。られ。風雨。暴。是。以て。宿。あ。ね  
世の壁。諭。と。そ。され。ば。冥。初。々。の。由。手。ひ。ト。て。は。店。所。と。仰。合。され  
松。通。と。朝。比。左。よ。嫁。せ。し。め。う。り。と。内。に。ち。ん。定。あ。る。外。ゆ。条。相。摸。守。表。時  
是。を。嫁。ミ。尼。公。又。折。り。し。や。終。よ。支。ゆ。ふ。の。み。う。夫。庵。よ。局。を。而。取。の。ふ  
や。か。ふ。も。店。所。す。も。惜。や。せ。り。ど。も。ガ。る。く。夕。局。を。キ。ナ。ウ。ス  
我。す。モ。柏。田。左。望。金。寺。方。朝。堅。の。あ。人。君。の。由。手。ひ。と。經。び。美。秀。ふ。も  
ナ。度。有。ぐ。う。を。申。仁。ゆ。そ。て。店。所。旅。居。う。し。ふ。尼。公。ト。う。店。す  
もう。け。の。廻。ひ。ど。剝。局。へ。局。の。街。面。へ。下。ト。せ。半。ト。あ。ハ。ぬ。ト。以。次  
ト。う。も。大。よ。力。と。あ。し。或。と。恚。あ。い。ハ。歌。た。僅。よ。一。人。の。女。と。湯。ん。と  
君。の。店。手。ひ。左。す。尼。公。の。嫉。妬。よ。傷。く。押。へ。り。よ。こ。そ。非。な。み。と  
怨。を。快。り。又。笑。聲。す。も。け。う。歌。告。り。モ。ゾ。妾。登。吹。て。わ。始。ト

か  
かあんとらひ。朝けよ端りんとみとらん。尼公はく一出わよ  
まぐり。利発の女性さんども。飽きで嫉妬したせ。義理も法も無だ  
依怙見に負のゆきのと。婦の長た舌あら。國家の禍との。秀が  
朝時を助け。かと氣をうぶが有る。朝けが名をさるは。つが耳をう  
し。國家の為とくの事されども。皆國家の吉凶ある。秀も  
情ゆゑへ。木石同の族。却て恩を多狹く。了の拒んと  
和田一族よおそ万の駆けづれ。我先まく。上総の國司代  
所をセリ。一ノ年の間じゆきもあく捨てまへ。尼公と義時  
が支えよろそこ。我先とまゆ。難とあやめ止む。武の祇辱され  
ども。まゆのゆゑとくひ。歎狀を下せし。義時已がひよりを  
難く。我みせかみうふ。老父怒ま。ワグ一世ががく。嫉妬を

いづれ支止む。先ゆきびの休。局の義をとす。事記。且朝け  
迷ひ牛くる後されば。拒み止めう。先ホハ松う。と  
りじも。人よろそく。乳と祀ま。基とある。ワグ母歿。今く。塗  
あり。安ホ社年。のゆうれべ。すく怒つて。すくあり。と。往思を  
ち。した。を。悟。と。うれべ。教訓。けと。バ。兄弟の子ども。又。ア  
ム。を。感。ト。憤。怒。の。元。と。押。へ。朝比奈。す。是。を。告。く。局。が。す  
ニ公の。は。筒。を。ま。た。す。も。わ。と。と。宿。や。笑。招。す。を。入。合。居。を。系。  
か。ね。あ。の。る。ハ。尼。公。の。は。あ。よ。至。て。も。新。秀。が。ゆ。の。と。あり。ひ。互。ひ。ユ  
か。の。底。の。感。を。感。ト。夫。婦。と。あ。ん。契。約。を。せ。白。う。い。キ。と。深。く。

透するもろく〳〵とりども。陽光同院の結びをかひよ。君  
夫婦の店原情よとく。既にかひゆをせんとせとこう。方す  
一貫よ空く外の店所よ近まれ。尼公のうん例を離しゆれ。され  
偏よ押込同院の永の上名すも。縁金は所と時めけれども。  
吳公の住居よとくべ。想入人の夜まへ。ゆきのあくぬ宿や  
やと。朝夕は嘗悲え。人よとま下笑せどと涙を蓄むところの  
辛苦。一方あくぬ歌ひあり。尼公みへるを嘆ふ。招みと向ひ  
えりよ。終日終夜愁傷の傍まゝ。尼公こまく死ふをあひ。  
御近くで見き。その方の為とゆり。ば歎よ招金の如よ。うやく  
懇意の傍まゝ。朝時改を慕みて一貫誘ひ歩せり。おひ餘すの  
より。それともちと身を無へ名乗ゆ。へ優一死まゆるをや。

みて糸合の縁もあり。不経とぞよ中。その方よ尊慕の心  
う。ほどのよふかよ。疾う我よおせうべ表向みて途とせん  
りの次。車よとく。身体の不快がよくな。去うべり。うに  
者のかすでひそむる心態の不似うれば。近づくら朝時とゆび  
返すの方と夫婦よとく。彼の自らの甥みて。小糸家の  
次男うれば。この方がたえ幸の夫よべ。ゆゑるとうれと  
宣ひけよ。ねじぬ度毎よと養。忍び涙を飲んで聲と  
玉す。絹かせぐら。響きの聲うら。尼公がまよとその方と見ゆ  
う。尼公へ此聲をあげ。肩をすくぬ身と有がてに牛ひ城とく。義  
我弟のよく今を尼公の仰。墮ひゆくも。紫花と魔く。清音の



縛を受へさん。女の方辱められて。何卒縛廻の手へは先  
下され。出家とも違へまいとす。尼公笑ひ歸れ。不審ある。  
接拶うる。武翁の手ひも私事す。ちよよとて我方へ送り我ま  
は方を定め表向必定のとされば。准り先と否。古昔の統と  
せんとく何うぞや。殊文出家とすも。幸いに御がじこと。不與の  
縛ふく責訊り。局がりそく。おそれあらゆるよりども。女の身  
かへ五障の罪。三従の道あるべからず。幼かく嫁すも。又毋  
す従ひ。その又毎の免よ像く夫と定めど。女の道よりども。准  
まづ。官仕。代縫糸。宿供り。まつて。又毋と仰ぐ。心を。所。仰  
え。是。従ひある。是別父母への孝行。又仕ある。君君への忠貞。又  
四念の心下。かく。一旦縛廻仰せられり。おもて父母への仰

隨ひ。正清や上。夫あり。我身みす。既。今尼公の仰うりとて。  
化へ縛廻り。て。身の私あふ。定め。ひき。親のちんみがむ  
及。古。よ。り。る。彼是と存。下せ。鬼角。つ。身。法の妨げと  
あうれば。世外逍遙。黒凜の身と。あう。友がひよ。と。候。よ。か。經。と。ナ  
上。う。ニ公例の嫉妬。みて。ね。そ。ひ。私。秀。と。密通。と。居。者  
あ。と。人。何。ぞ。心。の。え。手。され。ば。そ。終。よ。ん。ぬ。私。秀。よ。ひ。中。ど。そ。と。ぐ  
す。し。羽。時。と。嫌。ひ。我。納。と。背。く。不。届。者。と。心。よ。怒。と。発。一。ひ。元。父  
を。す。く。仰。ぐ。そ。の。方。根。よ。そ。親。の。令。こと。号。い。眞。女。と。そ。く。私。底  
却。て。不。安。之。手。を。ハ。つ。が。嫌。う。汝。が。爲。我。私。我。も。う。よ。あ。と。ぎ。や。私。く  
ほ。と。ヤ。が。今。汝。店。主。の。絶。よ。ほ。り。汝。も。ス。コ。ボ。ミ。サ。マ。行。従。べ。一。見  
ゆ。を。う。ナ。付。そ。と。も。表。主。が。う。私。う。れ。が。不。ユ。た。べ。以。ヤ。親。の

犯すれ我斗ひを省へは言へ我ニ不孝とう。汝へは言へ不孝とう  
べ。唯内へ義秀と云習ひてあまうて朝時を婦ひ。つゝ初を  
用ひざと云々と太よ怒り罵りてベ尠サの怖。と云尼公の  
仰もり是あづと承りて成程御の御るは方。或おのちん  
母公は後くせゆべ私の五子も同あよし。仕へまうるを  
は意外よゆりど。又之後の教も。又母よ行ひて西行へど。  
又母の御よ徒と云ひて。たゞ尼公の坐るもよろて。は意ふ  
う改め仰候くとも。ま實ちんせうする後よゆりだ。さくべ  
先のは頃よほひをうが。やううまけの道よゆり。我身の考とえん  
とぞれ。は意下のじ不孝とある。かくあぬおゆり。尼法師  
も形を変はせの細をひてゆる。御とおもあはは意ふのちん

約も立ち不右の筋もあらず。と存つてその如ひよこそ。甥君を  
嫌ひ義秀と密通せりとみん疑ひ。比義へや。至るもあくまど  
みてゆ甥君自ら紙持ひ出ゆとれ。空はひて。不義密通の  
名。遁もとぞ。ひやよ堅く辟退り。と。されど。奉済  
のち。所そ。甥君よ歸りと仰。ゆく。あくまど  
これども。の義秀。胡比奈ど。の。ゆく。んと。の。仰。ゆく。事済  
のち。所そ。甥君よ歸りと。仰。ゆく。あくまど  
甥君。の。義秀。罪の。あら。と。の。仰。と。不。と。ヤ。さ。べ  
あくまど。義秀。は。見。写。よ。空。ひ。上。へ。又。外。へ。ゆ。べ。あん。と。貞。女。の  
道。よ。あ。と。ざ。や。一筋。よ。と。ひ。定。あ。ゆ。今。あ。ても。尼。公。の。じ。下。か。り  
従。ひ。ゆ。ぐ。あくま。と。甥君。と。密通。い。き。や。ゆ。ま。す。と。仰。舟。よ。

先約と背ひ渡は仰きされ。如時来る索不食者ありと  
嘲られ。えべ。恐る。尼公の店名す。汚毛左近ゆひどやと。  
ほり。如く。言す。尼公も言ひ。人泊多く。内公夜凶のぞ  
怒り。かく。ども。ほよ。傍へた。遙き。けよ。白眼。足。こざを  
立。ま。糞の間。よへま。

